

56

フマル酸ケトチフェンによる
接触皮膚炎の4例

平田雅子、市川眞喜子、大井綱郎
(東京医大八王子医療センター皮膚科)
金井貴子
(東京医大霞ヶ浦病院皮膚科)

抗アレルギー剤点眼液である、フマル酸ケトチフェン(ザジテン®)点眼液による接触皮膚炎を4症例経験したので、臨床所見および貼布試験結果を合わせて報告した。

4症例はそれぞれザジテン®点眼液を使用してから、症例1では2カ月後、症例2では約1カ月後、症例3では1年3カ月後、症例4では約1カ月後に、眼瞼部に異常所見を呈した。使用薬剤のas is 貼布試験にて4症例ともザジテン®点眼液に一致して紅斑を認めたことから、ザジテン点眼液による接触皮膚炎と診断した。次にザジテン®点眼液の成分別貼布試験を施行したところ、4症例とも主剤であるフマル酸ケトチフェンの希釈系列で陽性、保存剤である塩化ベンザルコニウムは陰性であったことから、フマル酸ケトチフェンによるアレルギー性接触皮膚炎と判断した。なお、点眼液の貼布試験では基剤により反応が異なることが知られているため、蒸留水基剤と白色ワセリン基剤にて検討したところ、結果は蒸留水基剤の方が反応が強く、白色ワセリン基剤では弱かった。これはフマル酸ケトチフェンは、フマル酸が塩基性のケトチフェンを中和して塩の状態安定化させているために、水溶液中ではイオンに解離し易いという性質となっており、単にワセリン基剤に混ぜているあるよりも拡散し易いためであると思われた。

ザジテン点眼液は1991年7月に発売されて以来2年間に自験例を含めて19例の報告がある。アレルギー点眼液による接触皮膚炎は、その症状が本来の使用目的である結膜炎とかさなり、接触皮膚炎がおっていると気付かないで継続使用していることが多く、少しでも疑った時には積極的に貼布試験を行うことが肝要と思われた。

57

当科外来における皮膚細菌感染症の疾患別
分離菌頻度と薬剤感受性について

(皮膚科)

小宅慎一、楠原紀子、大久保ゆかり、
徳田安章

要旨：1989年から1991年に東京医科大学皮膚科外来を受診した皮膚細菌感染症患者のうち、細菌培養を施行した764例について疾患別分離菌頻度と、黄色ブドウ球菌(黄ブ菌)、連鎖球菌について薬剤感受性を検討した。手囊炎、膿疱性痤瘡ではCNSが、癬・癬群、伝染性膿痂疹群・深膿痂疹群、丹毒・蜂窩織炎群では黄ブ菌が多く検出された。慢性膿皮症ではCNS、グラム陰性桿菌が、感染性粉瘤では嫌気性菌が高頻度にみられた。爪囲炎ではCNS、黄ブ菌、グラム陰性桿菌など多彩な菌が検出された。二次感染群では手足を除く湿疹・皮膚炎群で高率に黄ブ菌が分離され、足白癬・異汗性湿疹・手湿疹群では、連鎖球菌が黄ブ菌に次いで多くみられた。グラム陰性桿菌は、足白癬・異汗性湿疹・手湿疹群、潰瘍・褥瘡群で比較的多くみられた。黄ブ菌ではPCGで半数以上PIPC、EMではそれぞれ約30%、約20%が感受性無しだった。セフェム系では全てで90%以上が感受性有りだった。連鎖球菌はAMK、OFLX、DMPPCでそれぞれ約95%、約35%、約20%が感受性無しだった。DMPPC以外のペニシリン系、セフェム系薬剤では感受性有りが100%だった。